

# 中学校歴史的分野における地域素材の活用

## —民衆史と社会史を視点にして—

高橋 拓匡

### 1. 論文構成

序章 問題の所在と研究の目的

第1節 問題の所在

第2節 本論文の目的

第3節 論文の概要

第1章 民衆史・社会史を取り扱う意義

第1節 歴史学における民衆史・社会史の位置づけ

第2節 地域素材と民衆史・社会史

第2章 授業実践事例の分析・考察

第1節 分析考察する授業実践の概要

第2節 分析・考察する際の視点

第3節 全国における授業実践事例の分析・考察

第3章 授業案の構想

第1節 授業のねらいと意義

第2節 本時案の概要

終章 本研究のまとめと今後の課題

第1節 本研究のまとめ

第2節 今後の課題

参考文献・論文・URL

### 2. 問題の所在と研究の目的

#### (1) 問題の所在

これまでの中学校社会科の学習において、いわゆる教師主導型、知識詰め込み型の学習が多く行われてしまっている。特にそれは教師側から入試対策としての授業構成の意味合いが強く、学習者が十分な歴史認識がされないうちに多くの知識を詰め込むような授業を展開してきたためだと考えられる。そのために、社会科に関する学習意欲、興味や関心をなくしてしまい、社会科を『暗記教科』として認識してしまい、学ぶ楽

しさを感じずに学んでしまう。特にその傾向は歴史的分野に多いように筆者は考える。歴史的分野では、その時代について多くの人物の名前を暗記し、また、その時代の出来事や文化についての数多くの名称を一語一語一生懸命に暗記していかなければいけないことが多く、学習者はその部分に作業を費やしてしまうために興味や関心を失ってしまう。

筆者は、歴史教育における生徒の興味や関心を引きこせるためや歴史を捉えやすくするための手段として、民衆史や社会史からの視点を歴史教育の中で用いるべきではないかと考える。社会史や民衆史を活用することで、社会的事象が学習者にとって違う世界の出来事ではなくより身近なものとして実感できることがより可能になるからである。菊池哲雄氏は「生徒たちが過去の民衆をみるとき、かれらは自分自身を過去の民衆に置きかえようとする<sup>1</sup>」と学習者自身が当時の民衆に身を置いて、歴史を主体的に学習を行うことを述べている。つまり、社会史や民衆史を用いて歴史学習をすることは、学習者の興味や関心を呼び起こすことだけでなく、主体的な学習を行うことができるようになる手立ての1つなのである。

また、中学校社会科指導要領において、目標の(4)に「身近な地域の歴史や具大的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」ことを目標としているように、地域を用いた歴史学習が進められている。しかし、身近な地域題材を挙げるときにどのような観点から挙げればいいのか、ということが問題になる。天皇や支配者側からの視点で見た中央の

歴史と民衆の日々の暮らしや生活についての視点である地方史との相互関連をし、歴史的事象を多面的、多角的に考えることができるようにする必要がある。筆者は、中央史と地方史が相互に関連しやすくするためのものが社会史や民衆史ではないかと考える。よって、社会史や民衆史を活用した地域素材の可能性に筆者は研究をしていきたい。

## (2) 研究の目的

本研究の目的は、中学校歴史教育における暗記中心、内容中心の学習から脱却するための1つの手立てとして、社会史や民衆史を用いて歴史的事象を中央史と地方史との観点から多面的、多角的に考察することができる授業カリキュラムを構築することである。また、その中で社会史や民衆史の観点から筆者の出身地である秋田県についての地域素材を考察し、授業案を考察していくことである。

筆者は、民衆史と社会史を歴史教育に活用する意義として以下のようなことが挙げられると考える。1点目は、学習者である子どもにとって身近な存在である民衆を用いることによって歴史学習に対してより興味関心を持たせることができると考える。これまでの歴史学習においては知識偏重であったことを筆者は第1節で述べた。そのために、子どもが住んでいる地域の民衆を用いることで、歴史により興味関心を持たせることができると考える。

2点目は、歴史的事象の事実認識や関係認識を把握することでより歴史的事象の理解を深めることができるということである。事実認識においては、住んでいる地域の歴史的事象を把握することで地域の歴史について理解することができる。また、民衆からの視点の

歴史と為政者や権力者から見た歴史を理解することで民衆や為政者との関係や中央と地域の歴史の関係から歴史像を形成することができると思う。

研究の方法については、まず、民衆史や社会史についてどのような学問であるのか、ということを歴史学の位置づけから考察をする。そして、歴史教育において民衆史や社会史がどのような意義あるのか、ということ考察をする。また、地域素材と民衆史や社会史がどのような関係があるのかということ考察していく。その考察を踏まえて、授業実践を分析し、考察をする。授業実践は、歴史地理教育者協議会発行の『歴史地理教育』における授業実践を抽出した。第3章では第2章で分析、考察をした結果を踏まえて授業案を考案していく。

## (3) 論文の概要

第1章では、民衆史、社会史と地域素材の関係について考察をした。第1節においては、歴史学における民衆史と社会史の位置づけを歴史的変遷を踏まえて考察し、民衆史を民衆の労働や生活、闘争の実態を研究する分野、社会史を民衆の生活からその時代における支配者と民衆の関係の構造であったり、相互の関係であったりと細部について研究していく分野であるととらえた。第2節では、地域素材と民衆史、社会史のどう関連することができるか、ということ考察した。第1項においては、歴史教育における民衆史、社会史の有用性について考察した。民衆史、社会史を活用することによって、地域の歴史と中央の歴史を比較することができること、また、1面的しかとらえられなかった歴史認識を民衆や為政者といった視点を増やすことによってより深い歴史認識ができるようになることを

述べた。また、民衆史や社会史を活用することによって、使用する歴史史料が絵巻物や絵図などの絵画史料や『今昔物語集』などに乗る説話の使用可能になったことを述べた。第2項は地域素材を活用する意義について述べ、第3項、第4項では地域素材と民衆史、社会史の関連性について考察をした。中学校歴史的分野において、子どもたちに身近な地域を学習に用いることによって、学習する単元により興味関心を持つことができる。また、地域の歴史的事象と全体史の歴史的事象を比較することによって、歴史的事象や学習している時代の時代像について理解を深めることができることの2点を述べた。第3項においては、民衆史から地域素材を活用することの意義について考察した。民衆史において、民衆の視点から歴史的事象を考察するときは、歴史的事象を多面的多角的に考察することができること、また、学習者である子どもたちの興味関心をより高めて学習をすることができることの2点を挙げた。第4項では、地域素材と社会史の関連について考察をした。社会史を用いることによって、学習する際の資料として提示できるものの幅が広がるということを第1項と関連して述べた。また、民衆史と同じく、民衆を対象にして歴史的事象を考えるために、興味関心を高めることができることも述べた。

第2章においては、授業実践を分析、考察をした。授業分析を取り上げる際に、歴史地理教育者協議会発行の『歴史地理教育』の過去10年分の中学校歴史的分野の授業実践を6件抽出した。

分析の視点は以下ようになる。

民衆史からの視点としては、

- ・民衆の生活の様子を把握しているか。

- ・民衆の生活環境を把握しているか。

社会からの視点としては、

- ・為政者や権力者、支配者と民衆の関係を考察しているか。

- ・民衆と民衆の同じ立場の関係を考察しているか。

また、史料を用いる視点としては、

- ・史料をどのような目的から用いているか。

- ・どのような史料を用いているか。

の6点を挙げ、授業実践を分析、考察をした。民衆史の視点としての分析、考察では、「民衆の実態とは何を示しているのか」ということ、第1章でも考察した通り、興味関心を高めることができているということ、民衆の生活環境について迫っているということ、の3点の分析結果から考察をした。民衆の実態においては、民衆の生活の様子や闘争での状況といった「実態」という言葉には多くの視点が含まれていることを述べた。そのうえで、今回の授業実践においては、生活環境についてとらえている授業が多いことを述べた。社会史からの視点では、それぞれの授業で、これまでの歴史学習においてはほとんど用いられていない史料を用いて学習をしていること、事実認識だけでなく、関係認識までそれぞれの授業は考えていること、地域の歴史的事象を全体史と深く関連付けて考えさせていることの3点を挙げた。その中で、絵画史料の有用性にも触れ、関係認識を持たせる際に、様々な史料を用いる必要があることを述べた。

第3章においては、筆者が在住している秋田市の久保田城下町を用いて、江戸時代の身分制について考える授業案を作成した。単元構成としては、全2時間構成として単元案を作成した。本時案としては、1時間

目を作成した。内容としては、武士と町民がどこに住んでいるのかという民衆の生活環境に触れさせ、そのうえでそれぞれの違いからそれぞれの身分の違いによって住む場所も変わる、という授業実践を作成した。

#### (4) 今後の課題

筆者は今後の課題として、以下のようなことが挙げられると考える。

1 点目として、歴史史料の精選方法についてである。社会史の成果としては教材となる歴史史料の幅が広がるということを本論文では述べた。しかし、史料の幅が広がるといっても何もかも授業で用いていいわけではない。歴史史料の問題点として、その事実をしっかりと把握できているのか、という問題点がある。そのため、いわゆる「物語論」というかたちにならないようにするために、歴史史料を選定する基準について考察すべきであると筆者は考える。

2 点目としては、民衆の生きざまや姿をもっと把握する必要があるということである。本論文では、生活環境である住居から久保田城の民衆の実態について授業案を考察した。しかし、その民衆が生きている姿を追っていくことは本論文の授業案では考察することはできなかった。4 月からは実際に子どもたちに社会科を教えるため、民衆の生きている姿から歴史像を作ることができよう、その学習方法について考察をしたい。

3 点目として、地域素材と民衆史、社会史の関連についてももっと深く関連を図らせる必要がある。地域素材の有用性として、地域の歴史的事象からより全体史との関係について考え、歴史的事象についてより深い認識を図ることができることである。本論文では、そ

の点について深く考察をしてきたが、授業案を作成するにあたってのどのようにしてより深い教材研究する必要があると思われる。そのため、地域素材と民衆史、社会史との関連についてより考察すべき余地があると考え。

---

<sup>1</sup> 鈴木哲雄著『社会史と歴史教育』（岩田書院、1998年）、28頁。